

コンポジウム気仙沼における「両極の一致」

— 復興支援とアートイベントに関する一考察

大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程 八木景之・沈一撃・王文潔

大阪大学大学院 人間科学研究科 教授 稲場圭信

1. はじめに

本研究は、2015年より宮城県気仙沼市にて開催されているアートイベント「コンポジウム気仙沼」において、得られた知見を報告するものである。

筆者らは本イベントに計4回参加し、運営スタッフとして参与観察を行った。そして、実行委員会のメンバー複数名に聞き取り調査を行うとともに、各回の来場者に質問紙調査を行った。その結果として、本イベントが多く参加者から評価され、その価値を認められていたことが明らかになったが、その要因の一つは、「両極の一致」によるものと思われる。すなわち、ある観点からは「両極」に位置するように見えるものを、巧みに融合させたがゆえに、本イベントには特有の価値が生じたのではないだろうか。

例えば、本イベントの実行委員会は、「我々（被災地の人々）」と「よそ者（それ以外の人々）」という、ある観点からは両極に位置するように見える人間集団を媒介し、共感に基づくイベント運営を実現させた

（第5章）。また同様に、イベントで演出された芸術作品は、「災害時」と「平常時」という両極に位置する二つの時間を、その独特の美によって媒介した（第6章）。本イベントの特徴は、人的な媒介者と美的な媒介者の双方が機能することによって、こうした亀裂を止揚し、価値を創出している点にある（第7章）。

2. 「コンポジウム気仙沼」の概要

「コンポジウム気仙沼」は、気仙沼の内外に住む人々によって作り上げられたアートイベントである。「コンポジウム」とは、「コンサート」と「シンポジウム」が合わさった造語であり、「コンポジウム気仙沼」は、東日本大震災によって亡くなられた方々に鎮

魂の祈りを捧げ、復興や未来への想いをつなげるために企画された。

本イベントは、気仙沼市民を中心とする実行委員会のもとで、2015年に「レクイエムプロジェクト気仙沼」として開催された。そして2016年には「コンポジウム気仙沼」に名称を変更し、2018年までに計4回開催されており、毎回数百人の一般来場者や出演者が参加している。イベントの内容は多岐にわたるものであり、追悼法要や未来の気仙沼を語り合うトーク、伝統芸能、音楽やダンスによる演出など、様々な演目が実施された。



（図1）気仙沼アマチュアコーラス連絡会による合唱

そして特徴的であるのが、本イベントにおいては、そうした演出が、巨大な水彩画（縦5m40cm×横16m50cm）の前で行われるという点である。この水彩画は、宮城県蔵王町出身の画家である加川広重氏によるもので、《雪に包まれる被災地》、《南三陸の黄金》、《太陽と星の間》、《共徳丸と海》などと名付けられた作品が、舞台の背景として毎年展示されており、その背景の前で、古くから伝承されてきた個性豊かな郷土芸能などが、気仙沼の人々によって演じられる。

例えば、コンポジウム気仙沼の初回から出演している「気仙沼アマチュアコーラス連絡会」は、会場を包

むやましい歌声で復興への想いを観客に届けており、地元の「保存会」による大漁を祝う《大谷大漁唄い込み》は、海と共に生きる気仙沼の漁師の意気込みを感じさせる演出であった。2018年のコンポジウムでは、児童数減少に伴う閉校をひかえた市立水梨小学校の生徒たちが、豊作や家内安全を願う羽田神楽《鳥舞》を披露し、「気仙沼の子どもの姿そのものが希望や復興の源です」といった感想が観客から寄せられた。そして、初回から参加している気仙沼太鼓学舎「ね」は、地元で愛されている《海潮音》などの曲に合わせて、息の合った迫力のある演奏を行い、大いに会場を盛り上げていた。

本イベントにおけるそうした演出は、いわゆる「アート」に分類されるものだけではない。例えば2017年のコンポジウム気仙沼では、被災者を追悼する「七回忌慰霊・復興祈願法要」が行われた。これは気仙沼の仏教者によって設立された「気仙沼仏教会」の初事業でもあった。



(図2) 気仙沼仏教会による七回忌慰霊・復興祈願法要

その様子について翌日の三陸新報は、「何本ものろうそくを前に、宗派の垣根を越えて集まった住職らがお経を唱え、震災犠牲者の冥福や早期復興を一心に願った」と報じている。さらに、地域内外の復興の担い手たちが、ステージでの対談を通して、気仙沼の未来について語り合うといった演出も見られた。2018年のコンポジウム気仙沼では、「気仙沼を歩く人が少ない」という町の課題を解決するためのアイデアを地元の高校生が発表した。地域の未来を担う若者の熱意に、

会場から大きな拍手が送られた。

3. 気仙沼の状況

さて、本イベントが行われた気仙沼という地域についても、簡単に解説しておきたい。気仙沼は宮城県の北東端に位置する都市であり、総面積は332.44 km²、人口は62,724人(2019年10月末日時点)である⁽¹⁾。気仙沼は世界三大漁場の一つである三陸沖漁場をもち、古くから水産業が盛んであった。中でも、サンマやカツオなどの魚介類がとりわけ豊富であり、全国屈指の水揚げ実績を誇っている。そして、それに加えて特徴的なリアス海岸も一つの観光資源であり、水産業とともに観光業も気仙沼の基幹産業としての地位を占めている。

しかし2011年の東日本大震災は、そうした気仙沼の多くの命を一瞬にして奪い、基幹産業にも大打撃を与えた。地震に続いた津波により、気仙沼では人的被害1,357人(うち直接死1,034人、関連死109人、行方不明者214人)が発生し、地区の35%を占める22,359棟の家屋が被害を受けた⁽²⁾。また、基幹産業と関連施設が集積する南気仙沼地区や鹿折地区は、重油流失による火災で壊滅的な影響を受けた。その影響は今日においてもまだ続いており、2012年1月時点で、応急仮設住宅と民間賃貸(みなし仮設住宅)には13,025人が入居していたが、2019年10月末日時点でもなお48人の被災者が入居している⁽³⁾。

この震災は地域の過疎化や高齢化に拍車をかけた。2000年から2010年の間に人口が約10%減少するなど、東日本大震災以前から気仙沼は過疎化が進行していた⁽⁴⁾が、それから十年近くたった今日(2019年10月末日時点)においては、2011年2月末日時点の74,247人と比較すると、8年8カ月で約15.5%⁽⁵⁾減少しており、過疎地域市町村として指定されるに至った。また、2019年3月時点において、高齢者人口(65歳以上)が37.1%であることに加え、1人暮らしの比率は19.6%にのぼり、高齢化が進んでいると言える⁽⁶⁾。東日本大震災前から地域の課題として潜在的に存在し

ていた過疎化や高齢化の問題が、震災とその復興の過程においてさらに浮き彫りになった。

東日本大震災から 8 年が経過し、物理的な復興が進んでいる一方で、心の復興が大きな課題として残されている。多くの人々が、大切な人や思い出の場所の喪失がもたらす深い悲しみを抱えている。高台移転や擁壁、あるいは防潮堤や震災遺跡の解体工事をめぐり、被災者同士の間でも様々な軋轢や葛藤が生じている。いまだ仮設住宅に残されている方がいるなか、震災の記憶の風化が進んでいる。そしてその一方で、気仙沼に愛着をもち、伝統芸能の伝承やまちづくりに取り組んでいる地域の人々や、継続的に気仙沼に足を運び、気仙沼と縁を結んでいる地域外の人々もいる。被災の記憶を伝承するだけではなく、気仙沼への愛着から地域の未来を考える動きが起きている。コンポジウム気仙沼は、このような背景のもとで生まれた復興イベントである。

4. 研究手法と調査結果の概要

筆者らは、本イベントに 2015 年より計 4 回、企画段階から関わり、会場設営や当日の運営スタッフとして参与観察を行った。また、実行委員会を構成する様々なメンバー（被災者や芸術家、宗教者、市議会議員など）に聞き取り調査を行い、各回の来場者に対しても質問紙調査を行った。この質問紙調査は、イベントの満足度や自由記述による感想を尋ねるものであった。

ところで、こうしたアートイベントは、第 6 章で述べるように、地域の人々にたいしてネガティブな印象を与えるケースもある。しかし本イベントにおける質問紙調査においては、2017 年には 72 人中 63 人、2018 年には、84 人中 79 人が高い評価（5 段階評価において、「とても満足」「満足」の合計）を行っており、自由記述欄においても、「ありがとう」や「素晴らしい」「感動」といった表現が散見され、「祈りから希望、喜びを一杯頂きました。心より感謝します」といった、ポジティブな内容のコメントが見られた。

ではなぜ、本イベントは被災地において、このような形で受け入れられたのだろうか。今回の分析では、本イベントが実施される過程において、「二つの媒介者」が大きくそれに寄与したと考える。以降の章においては、この「二つの媒介者」について、解説を行いたい。

5. 「媒介者」としての実行委員会

高齢化が進む地域社会においては、血縁的・地縁的な連帯が重視されると考えられる。そうした状況の中では、外部から来た「よそ者」とも言える人々が、震災の記憶という敏感な要素を扱うイベントに関与することは、大きな困難を伴うように思われる。

しかし、この「コンポジウム気仙沼」の実行委員会は、「我々（被災者）」と「よそ者（外部から来た人々）」の隔たりを打ち破り、イベントを一定の成功へと導いたように思われる。本章では、ソーシャル・キャピタルの視点から、実行委員会が果たした「媒介者」の役割を考察したい。

ところで、Putnam (2000) などのソーシャル・キャピタル論で社会関係を類型化する場合、地縁・血縁などの同質性に基づく「結束型 (bonding)」、集団外部との繋がりなどの異質性に基づく「橋渡し型 (bridging)」の二種類に分類することが多い。高齢化や少子化が進む地域においては、社会関係の営みは、コミュニティの内部に向かう関係性が中心となると言えるが、気仙沼地域もまた、そうした「結束型」の社会関係が目立つかもしれない。

「結束-橋渡し」という現代ソーシャル・キャピタル論で定型化された図式には、根本的なところで「橋渡し型」の効果への期待が含まれる一方、「結束型」が社会的融合を阻むマイナス要因であると考えられるニュアンスも強い（佐藤 2003；渡辺 2011）。しかしながら、同質性の高い地域社会における「結束型」連帯の重要性は、決して否定すべきではない。震災前から既に過疎化が進んでいた気仙沼地域にとって、故郷への愛着が、地域のアイデンティティ形成に役立ってい

る側面があるだろう。例えば、震災後の町興しにおいても、コミュニティの連帯によるレジリエンスの効果は極めて重要であるとされる（和泉 2015）。

しかし、東日本大震災は、気仙沼の街並みを破壊したと同時に、地域のアイデンティティ維持にも大きなダメージを与えた。気仙沼のような沿岸部に位置する地域では、被災した住民が域外に避難したことによる人口減少だけでなく、その地域コミュニティの孤立も懸念されている（宮城県 2017）。そうした「被災」という現象が長期的にもたらす影響は、地域への愛着を損なう可能性もあるだろう。

また、「非日常」をもたらした震災が去ったとしても、壊された街並みは残り、住民共通の心象風景——「思い出の町」という、過去の「日常」がすり替えられるかもしれない。地域における場所や風景は、過去の連続性を現すものであり、長く住む人々にとって愛着を抱く対象でもある（山口 2012）。Raymond（2010）らは、これを「場所への愛着（place attachment）」と称し、個人の文脈（personal context）、コミュニティの文脈（community context）、自然環境の文脈（natural environment context）の三つの次元が存在すると定義した。中でもコミュニティの文脈の次元は、隣人愛（neighborhood attachment）、帰属意識（belongingness）、親密性（familiarity）などの要素と強く関連している。したがって、場所への共通の記憶は、地域アイデンティティの拠り所であり、「結束型」連帯を維持するための重要なバックグラウンドとも言える。そして、「場所への愛着」を損なうことは、地域における連帯感情の希薄化に繋がってゆく。

気仙沼においてもまた、「場所への愛着」と地域アイデンティティの関係性が見られる。例えば、津波に打ち上げられた漁船「第 18 共徳丸」の対応を巡って、「震災モニュメントとして保存すべき」と考える住民と、「震災のトラウマを呼び起こすため、撤去すべき」と考える住民が二派に分かれ、論争を繰り返した。海岸での堤防の建設に関しても、「次の津波に備えるた

めに作るべき」に対して、「堤防が海の景色を遮り、我々が知っている町ではなくなるのが嫌だ」といった意見の対立がみられた。このように、「日常」と「非日常」が衝突し、「場所への愛着」を損なうことに拒絶反応を示した人々が多く存在する。

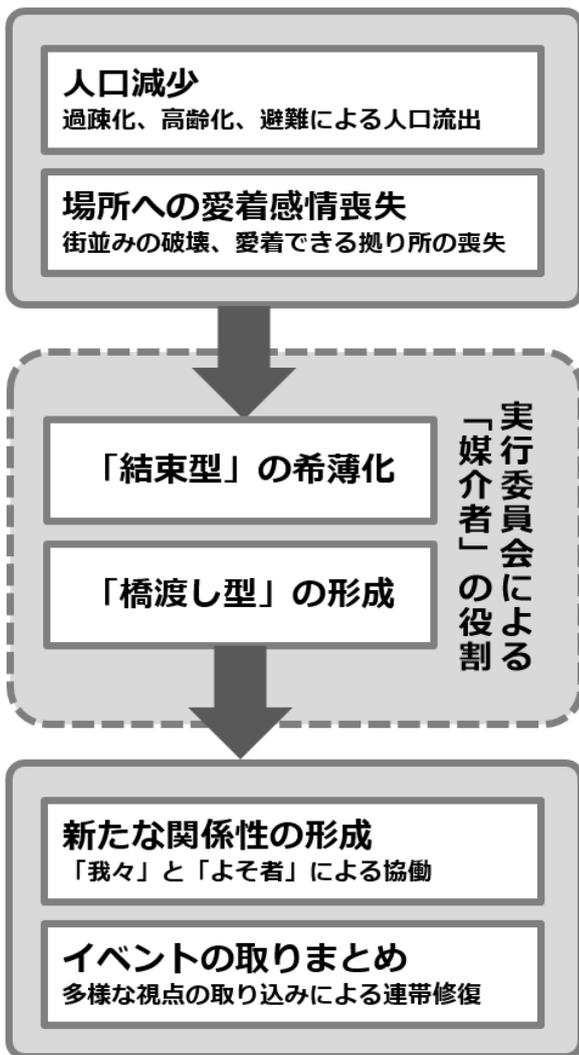
では、このような状況の中で、本イベントの実行委員会が果たした「媒介者」の役割は、いかなるものだったか。まずは、新たな関係性の形成である。2015年にイベントが始動して以来、地元の寺院の住職、市議会議員、地元商店主、地元コーラスグループ、NPO法人、外部からの芸術家、大学の研究室など、地域・階層を問わずに多くの人々が実行委員会の運営に関わった。そして、「よそ者」の参加とともに、イベントに新たなアイデアと活気が注がれた一方、もともと接点が比較的に少ない、地元の異なるコミュニティに属する人々同士もまた、協働する機会を得た。したがって実行委員会は、「橋渡し型」のソーシャル・キャピタルを醸成する土台となり、多様な参加者による新たな関係性を作り出し、親密な他者の減少にともなう連帯の希薄化が生じている気仙沼地域において、新たな連帯のあり方を提供することができた。

また、次に重要であるのが、実行委員会の努力によって、住民からイベントへの理解を得ることができたという点である。ここで特に注目すべきなのは、舞台の背景をかざる巨大な絵画のテーマとして、震災の風景を取り上げたことである。そもそも、震災の記憶・風景をテーマとする絵画の作成は、震災の記憶が「よそ者」の芸術家によって形にされることを意味し、拒絶反応を引き起こす危険性があった。しかし本イベントでは、その絵画を背景として地元住民によるコーラス、太鼓のパフォーマンス、震災時の記憶語りなどが行われ、結果として、「我々」と「よそ者」のいずれかの視点に偏ることなく、鎮魂の祈り、そして復興や未来への想いを皆が共有できたのではなかろうか。

住民のパフォーマンスと巨大画。そして「我々」と「よそ者」。そうした両者が合わさることにより、地元のアイデンティティの再確認に本イベントが寄与

した側面があると言えるかもしれない。以上を整理すると、実行委員会が果たした「媒介者」の役割は図3のようになるだろう。

すなわち、震災後の気仙沼地域においては、「結束型」の連帯が希薄化する恐れが生じていたが、そのような状況の中で、実行委員会そのものが「橋渡し型」の関係性を醸成する土台となり、「我々」と「よそ者」の「媒介者」の役割を果たし、新たな関係性を提供した。そうして、異なる背景を持つ人々を巻き込み、様々な考えを取り入れることによって、イベント自体が「共感」を土台として運営されるものへと昇華した。その結果として、本イベントは多くの地元の人々に受け入れられたと言えるのではないだろうか。



(図3) 実行委員会による「媒介者」の役割

6. 「媒介者」としての巨大画

前章で述べたように、コンポジウム気仙沼の実行委員会は、「我々」と「よそ者」を媒介し、本イベントが成立する土台を作り上げた。

では次に、その土台の上において展開されたアートに注目し、アートが被災地において展開されることの意義について検討を加えたい。すなわち、なぜ復興において、こうしたアートが必要なのだろうか。素朴な観点から復興を考えるのであれば、復興へのエネルギーは、生活あるいは産業インフラを再建するために投入されるべきであり、アートの必要性はそれほど大きくはないと考えることもできるかもしれない。

また、こうしたアートイベントは、「地域」と「アート」の間に何らかの衝突を引き起こすこともある。例えば宮本(2018:39)によると、こうしたイベントには「地域がアートの表現の道具として利用される」リスクが常に存在している。芸術家が、自身の表現のために地域を搾取するような性質の創作行為を行った場合、それは地域の人々に拒否感を与えることもあるかもしれない。さらに言えば、それとは逆の関係も好ましくはないだろう。すなわち徳田(2019:142)が指摘するように、芸術家が地域に対して完全に従属的になり、地域が芸術家を搾取する、といった型式の関係も理想的とはいえない。

そうではなく、その地域の個性と芸術家の個性が、それぞれの個性を發揮しながらも、一つの大きな文脈の中で共に位置づけられることにより、地域におけるアートは成功すると言えるだろうし、さらにそれが、被災地における人々の「心の復興」につながることで、被災地におけるアートは、徳田(2019:142)が主張するような、「幸福な関係」に至るように思われる。

ところで、本イベントにおけるアートは、第4章で述べた質問紙調査において高い評価を得ていた。したがって、少なくともある程度の範囲内においては、そうした「幸福な関係」が実現されていたのかもしれない。すなわち、地域と芸術家がつ、それぞれの個

性がとけあい、そこから生じた何らかの創造物が、被災者の心の癒やしにつながっていたのかもしれない。では、こうした癒やしは、本イベントにおいてはどのように実現されたのだろうか。

まず、本イベントにおいて展開されたさまざまな芸術の多くは、震災をテーマとする演出がなされているが、その結果として、さまざまな演出の中において「災害時」における情景が、その芸術を鑑賞する人々の心に浮かび上がる。

ここで注目されるのが、その芸術における演出は「過去」のものであり、「災害時」におけるものであるが、しかし鑑賞者は、あくまでも「現在」に存在し、災害のない「平常時」から、この芸術を享受しているという点である。その結果、本イベントにおいて展開される諸芸術においては、「災害時」と「平常時」が、あるいは「過去」と「現在」が、一つの芸術のなかで交錯し、その二つの時間が出会う事によって生じる緊張関係の中に特有の感動が生じるように思われる。

この点について、とりわけ第一筆者が関心を持ったのは、本イベントの舞台背景を飾る、横幅 16.5m・縦幅 5.4m にもおよぶ震災時の情景が描かれた巨大な絵画である。視界すべてを覆う絵の巨大さは、絵の中の世界と現実世界の境界を曖昧にさせ、「災害時」と「平常時」という二つの時間を媒介する。



(図4) 巨大画 《共徳丸と海》

大きな被害や苦しみを受けた人々の心のうちには、その世界観に大きな断絶が生じてしまう。すなわち、大災害を経験した人々においては、「災害時」と「平常時」はまったく異なる世界であるかのように記憶される。そうして、一つの時間の流れの中に包含されるはずの「過去」と「現在」は反発しあい、その二つの世界観は、心のなかで、その居場所を探ようになる。そして、このような世界観の分裂は、人々が被災から立ち上がり、力強く前に踏み出すことを妨げる側面があるように思われる。

しかし第一筆者の観察によると、この巨大画は、「平常時」と「災害時」という両極に存在する世界を一致させ、その亀裂の中に秩序をもたらすように思われる。この絵を鑑賞した2018年のイベント参加者の言葉を引用するのであれば、「気仙沼再興の想いが感じられ、心をゆさぶられる」という感覚を本作品は与えるのであり、あるいは本作品の作者の言葉を引用するならば、本作品は「観る人の想像力に作用」し、そして「悲しみを乗り越えていく自発的な活力を生み出す」のである。

ジンメル(1955:14)によると、芸術の本質は、様々な相反対立を統一するという点にある。そして、一般的な絵画においては、そうした「統一」は、その額縁の「内側」に巧みに配置された、人物や静物、その他様々な諸要素の間に現れ、その調和が美を創出する。

しかし本作品における最大の「美」は、そうした「内側」にある要素を統合するだけではなく、額縁の「外側」にある二つの時間が統合することによって生じるように思われる。すなわち、本作品の観賞者を飛び出した認識は、分断した二つの時間の出会いを本作品の中において経験する。そしてそれは再び観賞者の中に戻り、分断された世界観をその深い美によって秩序づける。

ところで、こうした世界観の秩序づけは、本質的には宗教の持つ機能でもあるように思われる。しかし本作品のような性質の芸術においては、その作品は芸術であることを超え、「救済芸術」とでも呼ぶべきもの

になりうるだろう。

震災によって生じた「平常時」と「災害時」という世界観の分断は、たとえ膨大な救援物資が被災地に流れ込んだとしても、それを統合することは困難であり、こうした非物質的な領域にこそ、アートならではの復興支援の一つの形があらわれるように思われる。

7. おわりに

本イベントには二つの「媒介者」が見られた。第一のそれは実行委員会であった。「我々」と「よそ者」の関係性は当然、何らかの点で対立的になることもあるだろう。しかし、稲場（2008:89）が主張するような、異なる人々が協働することによって生じる「価値観の衝突」とその解決こそが、思いやりや共感にもとづく「橋渡し型」の連帯に基づいた運営を実現したと言えるだろう。

また、第二のそれは、本イベントで展開された諸芸術であり、本論文ではその代表例として巨大画をあげた。この巨大画は、震災によって生じた「災害時」と「平常時」という二つの世界観を媒介した。

したがってこの二つの媒介者は、「我々」と「よそ者」という亀裂、そして「災害時」と「平常時」という亀裂を修復し、本イベントを成功へと導いたと言えるだろう（図5）。



（図5）二つの媒介者

こうした二つの媒介者により、本イベントは実現に至り、そして価値あるものになったと言える。もちろん、この「価値」とは、イベントにおける興行的成功

だけをさすのではない。そうではなく、震災によって生じた「我々」・「よそ者」といった両極と、「災害時」・「平常時」といった両極を本イベントが一致させ、参加した人々の心の中における分断の修復を通して、イベントの記憶そのものが、人々の「生」の統一性をあたたかく支え続けるような——そうした価値を本イベントは創出したのではなかろうか。

謝辞

本研究は JSPS 科研費基盤研究 B、JP17H02273 「復興期における震災文化の研究」（代表：弓山達也、2017-2019）の助成を受けたものです。

補注

- (1) 気仙沼市（令和元年10月末現在）「データで見る復興の状況」
https://www.kesennuma.miyagi.jp/sec/s019/010/030/010/data_fukkoujoukyou_011031.pdf（2019年12月2日確認）
- (2) 第1回「気仙沼市震災復興市民委員会」資料7 大震災に係る本市の被害状況について
<https://www.kesennuma.miyagi.jp/sec/s019/010/010/040/001/shimin1shiryo7.pdf>（2019年12月2日確認）
- (3) 気仙沼市（令和元年10月末現在）「データで見る復興の状況」
https://www.kesennuma.miyagi.jp/sec/s019/010/030/010/data_fukkoujoukyou_011031.pdf（2019年12月2日確認）
- (4) 総務省統計局 被災3県（岩手県、宮城県及び福島県）の沿岸地域の状況—平成22年国勢調査人口等基本集計結果及び小地域概数集計結果から
<https://www.stat.go.jp/info/today/041.html>（2019年12月2日確認）
- (5) この数値は、補注(3)に記載したウェブサイトの情報をもとに、筆者らが計算したものである。
- (6) 平成31年宮城県高齢者人口調査結果
https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/chouju/31koureisya_zinkou.html（2019年12月2日確認）

参考文献

- 1) 和泉浩（2015），『地域のレジリエンスにおけるソーシャル・キャピタルと記憶』，秋田大学教育文化学部研究紀要人文科学・社会科学部門，70,9-20.
- 2) 稲場圭信（2008），『思いやり格差が日本をダメにする～支え合う社会をつくる8つのアプローチ』，NHK出版.
- 3) 佐藤誠（2003），『社会資本とソーシャル・キャピタル』立命館国際研究，16（1），1-30.
- 4) ジンメル，ゲオルグ（1955），『芸術哲学』，斎藤栄治 訳，岩波書店.
- 5) 徳田剛（2019），「地域とアートの“幸福な関係”はいかにして可能か？—G・ジンメルのアイデアを参考に—」『フォーラム現代社会学 第18号』，関西社会学会.

- 6) 宮城県 (2017) , 『過疎地域自立促進方針』
<https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/645641.pdf> (2019-10-10)
- 7) 宮本結佳 (2018) , 『アートと地域づくりの社会学 直島・大島・越後妻有にみる記憶と創造』, 昭和堂.
- 8) 山口敬太 (2012) , 『風景の持続性に関する基礎的考察-景観の計画・運営における方法と課題』, 土木学会論文集 D3 (土木計画学) , 68 (5) , I_21-I_33.
- 9) 渡部奈々 (2011) , 『パットナムのソーシャル・キャピタル論に関する批判的考察』, 社会学論集, 18, 135-150.
- 10) Putnam, R. D. (2000) . Bowling alone: America's declining social capital. In Culture and politics (pp. 223-234) . Palgrave Macmillan, New York.
- 11) Raymond, C. M., Brown, G., & Weber, D. (2010) . The measurement of place attachment: Personal, community, and environmental connections. *Journal of environmental psychology*, 30 (4) , 422-434.